

25周年にあたって



25周年記念事業実行委員長 佐野 弘子

英米文学科同窓会は、2023年9月23日の同窓祭当日に創立25周年を祝いました。創設の準備に奔走され、発展させてくださった先輩方のご尽力の甲斐あって、最も活発な大学同窓会の一つと評されるにいたりました。会報発行、多彩な講師による講演やセミナーの定期的な実施、Christmas Songs & Teaの集いや社会科見学、東日本大震災復興支援コンサートの共催や地方支部との交流、冠奨学金給付制度を通じた在学生支援など、活動を外に拡げ、未来に繋いでまいりました。

ところが2020年が明けるや、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、同窓会も当面の予定を見合わせざるを得ませんでした。活動を制限されたまま休眠状態になってしまうのか、会長として困惑と不安は募るばかりでした。折しも、コロナ禍の副産物ともいえるオンライン会議システムの急速な普及に促され、導入を模索した結果、秋口には常任幹事会をオンラインで再開できました。

翌年1月には、長引くコロナ禍で疲弊した会員の心を癒し元気づけるために実施した、三遊亭遊史郎師匠の落語とインタビューからなる初のオンライン・イベントを皮切りに、試行錯誤を繰り返しながら、総会、講演、セミナーにいたるまでオンラインで開催しました。社会がアフターコロナのモー

ドに移行した2023年の総会以降は、対面とオンライン併用のハイブリッド方式を用いています。誰も想定しなかったパンデミックは、私たちに厳しい試練を与えました。しかし新しい生活様式にチャレンジしたことで、それまで首都圏在住の会員に偏っていた参加者が、遠方在住や外出困難の方々にまで拡大し、同窓会の絆を以前より強く実感することができました。

同窓会創立25周年は大きな節目です。これまでの四半世紀を振り返り、これからの四半世紀を見越せば、時代の変化にしなやかに対応することが求められます。また、世代・地域を問わず、会員にとって同窓会が生涯教育の場・心の拠り所として大いに資するものであることを願います。さらなる発展のために将来構想委員会を立ち上げ、真剣な検討を重ねて、会則の一部改正、役員組織の見直し、会報リニューアルを、2023年の総会に提案して承認されました。新たな課題は次々と生じるものですので、同窓会は今後も絶えず進化を続けてゆくでしょう。「会員相互の理解と親睦をはかると共に知的交流を深め、…大学および青山学院の発展に寄与する」という目的の実現のために。

(顧問 前会長 青山学院大学名誉教授 ‘70年卒)



四つのキャンパス 四方山話 (2)

厚木キャンパスの思い出の一つは、校舎の外壁にツタ(アイビー)を這わせたことです。殺風景なコンクリートむき出しの壁面をツタで覆わせようと、成長の速い種類を選んで植えたので、数年後にはキャンパスのあちこちに「ツタのからまる」校舎ができました。私の研究室があったF館の壁もかなりの面積がツタで覆われ、休み明けに窓を開けようとする

とツタが邪魔になるほどでした。思えばツタは厚木の地に青山学院のイメージを伝えてくれた気がします。

残念ながら、ある時期にツタは全部はがされてしまったので、厚木に通った世代でも若い方はツタのことをご存じないと思います。なぜツタはがされたかということ、ツタは壁面のメンテナンスを妨げ、外壁の傷みを早めることが問題になったため、青山キャンパスの本部棟「ツタのからまるチャペル」の外壁が傷んでしまったのが契機でした。かくして青山学院の建物からツタは消えました。

相模原キャンパスの校舎は明るい黄色のタイルを外壁に貼り付けた贅沢な仕上げで、ツタの出番はなかった



のですが、ケヤキ並木の根元の地面をツタで覆いました。青山学院のイメージは地表を覆うアイビーで受け継がれているのでしょうか。

黒沼 健 青山学院大学名誉教授
校友会大学部会長
‘70年理工学部卒

「私のイギリス滞在記」シリーズ

第1回 11月11日（土）14:00～16:00



講師 麻生 えりか
文学部英米文学科教授

ノッティンガムの風土、風景、文学 —D.H. ロレンスとアラン・シリトーの小説を中心に

青山祭の賑わいを経た晩秋のキャンパス。4年ぶりの麻生えりか教授の講演に心躍らせ会場へ。事前に『息子と恋人』和訳を読んで臨んだ。ロレンスについては『チャタレイ夫人の恋人』の著者との偏った知識しかなかったからだ。しかし講演でそれが偏見であり、ノッティンガムの炭鉱労働者階級出身のロレンスは、その生活を文学にした初の作家と知った。

ご紹介の三作品でロレンスは故郷：炭鉱を三つの視点から書いたと伺う。まず自伝的小説『息子と恋人』で、後には飛び出していく「谷底：bottoms」である炭鉱住居の生活を内側から、その匂い、冷たさ、家族不和の惨めさまで、痛々しいほどに記した。

『チャタレイ夫人の恋人』では炭鉱を、所有者の立場から上から見下ろす視点で。主人公は溶鉱炉の火に魅惑されつつも、炭坑地方、人々に親しみではなく、蔑みの眼を向ける。

そして晩年には故郷を外側からの視点で、「坑夫の居場所」は pub: パブと pit: 炭坑、学はなくとも打ちひしがれて



ロレンスが幼い頃過ごしたイーストウッド（ノッティンガムシャー）の街並み

はいなかった」と振り返る。そこには父の時代の坑夫への敬意、そして郷愁をも感じる。

一方、シリトーは坑夫自身の視線から、重労働に辟易しながらも、坑夫の気概や誇りを謳い上げてもいる。結局両者とも、後年苛酷だった炭鉱の生活を想う時、その感情に痛みと懐かしさが混じったのではないかな。そんな感慨を持った。

麻生教授の小気味よいテンポの講演に、参加者は熱心に、時に深く頷きつつ引き込まれた。茶話会では一転、茶菓に場も和み、講師と、また各テーブルで笑顔溢れるやりとりが交わされ、会が終わる頃には多くの「えりかファン」ができ、早くも次回を待ち望む声が聞かれた。



留学中の仲間と

（シヨルツ久美子 '81年卒）

第2回 11月25日（土）14:00～16:00



講師 伊達 直之
文学部英米文学科教授
文学部長
文学研究科長
大学図書館長

York での生活から見えてきた 地域文化と「文学」の現場

青山学院大学文学部長および来春新しい建物に生まれかわる図書館の図書館長として大変ご多忙な中、たくさんの資料、本を携えて我々のセミナーにお越しくくださった。

伊達教授は会社員として社会人生活を経験された後、英文学の道に進まれ、奥様と共にイギリスのヨーク大学へ1993年～1997年留学、1999年再度の留学で学位を取得された。長く生活されたヨークについて様々な角度からお話しいただいた。



第3回 12月9日(土) 13:00~15:00



講師 吉波 弘
青山学院大学名誉教授

オックスフォード大学で育まれた ファンタジーと言語文化に関わった 学者たちのゆかりの地を巡って

キャンパス内でクリスマスツリーが美しく輝く12月に第3回のセミナーが開催された。オックスフォード大学ハートフォード・カレッジでの在外研究と英米文学科の学生達の夏期研修引率のご経験から、オックスフォードの地理や歴史、大学の歴史、キャンパス内外のパブ(Public House)について地図や写真を用いて詳しく紹介して下さった。



ハートフォード・カレッジの南北を接続するハートフォード橋は、ヴェネツィアのため息橋に形が似ていることから Bridge of Sighs と呼ばれている。

オックスフォード大学は英語圏最古の大学であり、後に学生を管理する目的で寮が作られ、現在も続くカレッジ制度の始まりとなった。特にパブは、長い歴史があり、以前は子供達も ale を飲んでいただけという話には驚いたが、文人や教授、学生達の活発な議論の場として重要な位置を占めている。有名なパブとしては、The Turf Tavern, The Mitre などがあり、The Inklings に登場する C.S. Lewis, J.R.R. Tolkien, C. Williams は同じく有名なパブ The Eagle and Child で議論を交わしたという。

講義終了後、前会長の佐野先生からの Spoonerism(頭音変換)に関する質疑応答や受講者の方々のオックスフォード滞在経験のお話等、和やかな雰囲気でお開きとなった。予定後半の「テムズ川とアリス」、



The Turf Tavern での懇親

「オックスフォード大学の言語文化」を心待ちにしていた受講者からは、次の機会を期待したいという声も聞かれた。

(佐藤久美子 '80年卒)

フィリップ・ラーキンの「聖霊降臨祭の婚礼」(伊達先生訳)の朗読から始まった。目を閉じて聞いていると、ハルからロンドンへの車窓からの風景が私にも浮かんできた。先生はこの詩に出会って、文化人類学的フィールドワークに目覚められたとのこと。



ヨーク市内ミンスターの風景

先生ご夫妻の生活されたヨークは歴史ある街、城壁に囲まれた中世都市である。

ハルで水揚げされた魚を売るといふ魚屋、ハム、ソーセージの美味しい肉屋、総菜パンの美味しい店の紹介。イギリスには美味しいものがないという概念は覆された。イギリスは戦時体制が長く続き、配給制の影響で美味しいビールが消えていたが、伝統的なエールの復活を目指しビール業界を保護しようという CAMRA (Campaign for Real Ale) という団体があり、お酒に造詣の深い先生は入会されることになったとのこと。



ヨーク市内のマーケット

生活に根ざした興味深い話は尽きず、アジェンダにある地図の話、歴史的建造物、戦争、地質、TVドラマ、新聞、教会などについて触れられ、地域を観察して引き出しをたくさんしておくことで後々文学を深く感じる事ができると説かれた。もっともっとお聞きしたいと思いながらセミナーは和気藹々とした雰囲気の中終了した。

(須藤 玲子 '77年卒)

わたしの好きなヒーロー

～私立探偵フィリップ・マーロウ～ 浅田 洋二

私がまだ青学在学中の1978年に公開された角川映画『野生の証明』は、昨年亡くなられた同窓生森村誠一氏の原作で、高倉健、中野良子、薬師丸ひろ子らが出演した。その宣伝広告に「男はタフでなければ生きていけない。やさしくなければ生きていく資格がない」という台詞が使われた。町田義人の歌う主題歌「戦士の休息」に乗って流れたラジオ広告のこの台詞のナレーションは、主演の健さんのイメージにぴったり合っていた。

卒業後数年経って、丸谷オ一的の書いたこの角川映画に関するエッセイ（『夜明けのおやすみ』所収、1984年）に出会って、この台詞の出典がわかった。それは、米国のハードボイルド探偵小説の作家レイモンド・チャンドラー（Raymond Chandler）の長編小説 *Playback*（1958年、邦題は『プレイバック』）で、主人公の私立探偵フィリップ・マーロウ（Philip Marlowe）が女の問いに応じて言ったものだった。

「私の好きなヒーロー・ヒロイン」は、今回にて終了します。新たな連載をお楽しみに。

その原文は、“If I wasn't hard, I wouldn't be alive. If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.” 清水俊二訳（ハヤカワミステリー文庫）では「しっかりしていなかったら、生きていけない。やさしくなれなかったら、生きていく資格がない」となっており、丸谷はこちらの方が正しいと言う。確かに、原文のニュアンスをよく伝えている。とはいえ、映画の宣伝広告なら、あのセリフのほうが耳触りは良い。

それ以来、マーロウの登場する長編を立て続けに数編読んだ。マーロウという男は健さんとは違うカッコよさがある。女に冷たいところがあるが、男には優しいところがあり、それが女性読者にとってまた魅力的かもしれない。ロサンジェルの街がよく似合うし、バーで酒を飲みながら、あるいは女との別れ際に、気の利いたことを言うのがカッコいいのである。マーロウは、ハードボイルド探偵小説界を代表するヒーローとなった。（'81年卒）

【訃報】

同窓生で作家の森村誠一氏（1958年卒）が昨年7月に90歳で亡くなられました。森村氏は、同窓会15周年の記念講演で「青春の条件」と題して講演をされました。謹んで哀悼の意を表します。

INFORMATION

- 第20代学長に稻積宏誠副学長が就任
2023年12月16日
- 校友会130周年記念式典
3月23日（土）青学講堂
13:30～16:30 記念礼拝、コンサート
- 大学学位授与式（卒業式）3月25日（月）
- 大学入学式 4月1日（月）
- 大学同窓祭 9月16日（月・祝）
- 読者アンケートのお願い
直接同窓会ホームページか、以下のQRコードからアクセスして回答をお願いします。



青山学院大学文学部英米文学科同窓会

検索

回答の締切り 3月31日（日）

会員だより

COMMON ROOM

館山 裕（多摩市'75年卒）

寺澤先生の講演を一部抜粋したコラムが印象的でした。私はこの講演会には出席していませんが、このような講演会は英米文学科同窓会にふさわしい充実した内容であることに間違いありません。実は私は先生のこのご本、何年前かにすでに読んでいました。それはノルマン・コンクエスト当時はフランス語が、またそれ以後はアフリカやアジアの言語が英語に与えた影響について、当時現役大学生だった私の一番の関心事だったからです。

定年後は好きなゴルフとスキーを楽しむ、と決めていた私は、定年延長することなく過ごしてきましたが、膝をだめにしてそれどころではなくなりました。昨年からはフランス語を勉強し始め、フランス語と英語の強い関連性に今さらながらびっくりしています。はじめは両言語の相互関係を勉強することが、フランス語入門の動機だったのですが、今では話せ

ようになることが楽しくなり、今年（2023年）だけでも4回フランスに行くようになり、実は来月（12月）も7日から1ヶ月行ってまいります。

高橋 洋子（旧姓：棚田 柏市'67年卒）

会員だよりが一番心に残りました。御三方の、学びを忘れずご自身ができることを続けておられる姿勢に、感銘を受けました。まだまだNever Give Up!ですね。

いつまでも英語に触れていたいという気持ちからJazz Vocalを習い始めました。以前から歌っているシャンソンは、年を重ねるにつれ歌詞の意味の深さを理解できるようになった気がします。歌う楽しみを味わっています。

会員の訃報（敬称略）

小野 雅子（'59年卒）
名取 守之祐（'58年卒）
謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

1月1日に発生した能登半島地震にて被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。会報編集部は、本号から新体制でスタートしました。編集部一同、読者の皆様楽しくするために会報を作っていくと考えておりますので、よろしくお願いたします。（Y）

【原稿大募集】

「会員だより」の原稿を募集しています。会報の感想、近況報告などどんな話題でもいいので、ぜひ投稿をお願いします。今までに投稿された方も大歓迎です。原稿は200字以内。締切4月末日。送付はメールでも葉書でも結構です（末尾をご参照）。

【「私を変えた一冊、一節」原稿募集】

今まで読んできた本の中で、その後の人生が変わるきっかけになった本、自分の考えが前向きに変わった本、今でも繰り返し読む一節、迷った時に読む一節はありませんか。そういう本やその一部を紹介いただき、そのエピソードを交えたエッセイを募集しています。詩、小説、戯曲、エッセイ、評論、ノンフィクションなど本のジャンルは問いません。作品全体でもいいし、その一節でも構いません。原稿は900字以内。締切4月末日。送付はメールでも封書でも結構です。

◎郵便の送付先：

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

アイビーホール3F 校友会大学部会事務局内
【AS会員だより】または【AS一冊一節】係

◎メールアドレス：

aogaku.eibun.alumni2020@gmail.com

※いずれの場合も、氏名、日中連絡を取りやすい電話を明記ください。